
魔法少女リリカルなのは StrikerS ～小さな少年の小さな勇気～

海翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers ～小さな少年の小さな勇気～

【Nコード】

N0250Z

【作者名】

海翔

【あらすじ】

機動六課設立2年前フェイト・T・ハラOWNによって救われた少年。その少年はフェイトの養子となり機動六課に出向する。そして、これから大きな事件へと巻き込まれる。若き魔導師の生き様を描いた物語。魔法少女リリカルなのは Strikers ～小さな少年の小さな勇気～始まります。

PL 出会い

PL

Sideフェイト

2年前……

私はその日執務官の仕事である組織を落とす段取りをしていた。その組織は魔導師臓器売買を主とする組織で、本局の魔導師もかなりの数が殺されている。組織はそこそ大きく、相手も魔導師を雇っているためこちらも魔導師の平均ランクをAA以上にする必要がある。本局魔導師でも空戦、陸戦にとわずAAというのはそれほど多くない。どう頑張っても少数精鋭の部隊になる。

「テストロッサ・ハラオウン執務官、準備が整いました」

「わかりました」

今回召集した人員の準備が整い、転移の準備も終了した。

「これより、敵本拠地に行きます。皆さん死なないでください」

そう言って、すぐに敵の本拠地に転移、臨戦態勢をとる。敵が襲ってくる。

そう思って全員がデバイスを前に突き出す。

しかし――

私たちの前に現れた光景は彼らの想像をはるかに超えるものだった。

いや――

私も度胆を抜かれた。

私たちの目の前にあったのは――

死体

――ただそれだけだった。

それもただ殺されているだけではない。

ある者は腸を^{はいつた}ぶちまけ、

またある者は頭を破壊され、脳をあらわにし、

またある者は首から上が切断され、

またある者は下半身が丸ごとなくなっている。

そんな死体――

いや

”もの”だった。

それも理解した瞬間、死体が放つ独特の異臭が鼻を突く。
胃の中のもものが逆流するのを感じる。

それを必至に堪える。

しかし、後ろの隊員は我慢できずに嘔吐する。

吐き気を耐えきった私は隊員に告げる。

「気分の優れない者は艦隊に引き返してください」

それを聞き隊員たちは次々と戦場を離脱。

結果残ったのは私を含めたら名だけだった。

「それでは行きます」

ゆっくりだけど確実に一步一步進み続ける。

もちろん警戒は怠らない。

そばらく歩くと、小さな人影が見えた。
ゆっくりと近づき、影と私たちの距離は10mくらいになった。

「……」

近づいたからわかるが影の正体はまだ体も出来上がっていない子供だった。

背丈からして10歳もない。

その少年は右手に短いナイフを握っている。
左手にもよく見えないが何かを握っている。

「あなたはここで何をしていますのですか……？」

私は少年に聞く。

しかし、少年は何も答えない。

代わりにゆっくりと振り返ろうとする。

「……」

私もバルディッシュを構える。

少年は振り返る。

少年の顔が光にさらされる。

「——っ!!」

私は少年の表情に驚く。
少年は……泣いていた。
表情自体は笑っている。

それでも、眼からは涙が流れている。
少年はそんな表情のまま告げる。

——ボクヲコロシテクレルノ？——

「な、に…？」

一人の隊員が驚いたようにつぶやく。
少年は尚も続ける。

——ハヤクボクヲコロシテ——

少年は一步づつこちらに近づく。
少年が近付いたおかげで少年の全体を光が照らす。
少年が照らされた瞬間、私たちに戦慄が走った。
少年の右手にはさっき見た首が切断された死体の頭が握られいた。

——ネエコロシテヨ？——

少年はまた近づいてくる。
私たちは一步下がる。
しかし、ここで私は考えた。
なのはならこの状況をどうするだろう、と。
なのはならあの子に砲撃を浴びせるだろうか？
なのはならあの子を殺すだろうか？
なのはならあの子を見捨てるだろうか？

答えは——

否——

彼女ならこの子を助けるだろう。

彼女はこの子と話すだろう。

——彼女なら——

そう考えていたら、勝手に体が動いていた。

「私は、私たちは君を殺さないよ」

その言葉に少年は驚くことなく言葉を発する。

——ナンデ？——

そう彼はいった。

「君を救いたいから」

ゆっくりと言葉を紡ぐ私に隊員たちは啞然とする。

「何言っているんですか執務官！！」

「こんなにやばい子は早々に殺すべきです！！」

そんな心許無い言葉に私は頭に血が上る。

「黙ってください」

そついうとまた言葉を紡ぐ。

「私は君を助けたい。それが理由じゃ…ダメかな？」

彼は笑顔を崩さず、また歩みを止めない。

——ダメダヨ、ボクハコロサレナキヤイケナインダ——

「そんなことはないよ」

言葉を慎重に選びながら私もまた彼に向って歩き出す。

——ボクハシナナキヤイケナインダ——

「なんで？」

——ボクハイッパイヒトヲコロシタカラ——

「殺したくて殺したんじゃないんでしょう？」

——ソレデモコロシタコトニカワリハナイヨ——

「じゃあ、私がそれを許してあげる」

お互いに歩み続けた結果、今私たちは向かい合っている。
あと一歩踏み込めば彼の体に触れることができるくらいに……。

——ユルシテクレルノ？——

「うん、私が許す。だから泣いてもいいんだよ？」

私は彼をやさしく包み込む。

「だから、一緒に行こう？」

そうして彼は静かに泣き始めた。

これが私と彼の出会い。

PL 出会い（後書き）

初めて二次創作に手を出してみました、いろいろ大変ですね。

今回はPLということで主人公の過去について書いてみましたが、なんか…こう…ひどくない？

グロくない？

ひどいですよ、これ。

主人公の過去に何があったか逆に気になります、おもに私が。

ということで、なのはの二次創作〜小さな少年と小さな勇気〜を始めてみましたが
至らぬ点など多々あると思いますが、長い目で見ていただいたら幸いです。

あ、感想とか改善してほしい点などはどしどし言ってください。
がんばります。

おそらく不定期で行進になるとと思いますが気長にお待ちくれたら嬉しいです。

では、次は1話にて。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

第1話 彼の始まり（前書き）

祝1話！！

最近小説を書くのがつらく感じる時があります……。なぜでしょう…？

でも！！

これだけは最後まで書いてみせる！！

今回なんかグダグダする予感が……。

気にしないことにしましょう。

気にしたら負けでしょう…たぶん。

では、魔法少女リリカルなのはStrikers ～小さな少年の小さな勇気～

第1話 彼の始まり 始まります

第1話 彼の始まり

1話 彼の始まり

「ジュン、起きて」

「はあゝい」

夢を見ていた……。

すごく懐かしい夢。

僕と母さんの出会いと始まりの事件。

荒んだ場所。

腐臭の匂いが漂うあの場所。

あのおいが嫌で……。

人を殺したという感触が嫌いで……。

自分をモルモットとしか見てないあの研究員たちが嫌で……。

そんな中僕は子供ながらに思った。

——死にたい——

そんな間違った考えから救ってくれた目の前の女性、フェイト・T・ハラオウンの力になりたくて……。

僕は陸士士官学校に入学した。

もちろんお金なんてなかった。だから、フェイトさんに当時土下座してまで頼もうとしていた。

しかし、フェイトさんは快諾して、さらに——

『私の養子にならない？』

——とまで言ってくれた。もちろん僕もこれを快諾した。
そして、士官学校を1年で首席卒業。

陸戦Bランクを取り、母さんの執務官補佐としてこれまで1年半務めてきた。

「ジユン？　どうかした？」

「いや…なんでもないよ、母さん」

「あんまり無茶したらダメだよ？」

「わかってるよ」

母さんの過保護っぷりは今に始まったことではないが、これではエリオさんやキャロさんも苦労するだろう。

「ジユン一等陸士、準備が整いました」

「ありがとうございます」

どうやら転送準備が終わったようだ。

「行こう、母さん」

「うん」

僕たちは1週間後から1年母さんの幼馴染である八神はやて二等陸佐が今度立ち上げる新設部隊「遺失物管理部・機動六課」

フワード
FWは全員新人。

いや――

FWだけではない。

ロングアーチや整備士、デバイスマスターまでもが新人で構成されている。

そんな場所に僕が行ってもいいのか疑問だ。

「それではみなさん、しばらくのお別れですがしなない程度に頑張ってください」

「私たちは機動六課に行くけどみんなも元気だね？」

『ハイ！！！！』

そう言っ僕たちは部隊員の人たちに別れを告げた。

場所は変わって陸戦Bランク試験場。

「あ、フェイトちゃん、ジュンくん」

ヘリポートで待っていたはやて二佐がぼくたちに手を振る。
母さんは手を振り返し、近づいていく。

「お疲れ様です、八神二佐」

軽く敬礼をする。

「久しぶりやね、ジュンくん。あとはやてでいいで」

「そんなわけにはいきません。非公式の場ではそれでも構わないか

も知れませんが、ここは公式の場ですので」

「そんなこと言わなくてもいいんじゃないか？」

そう言つてヘリの中から出てきたパイロット。
確か機動六課でヘリのパイロットをする――

「ヴァイス陸曹ですね？」

「ああ、ジューンだったな」

「はい、ジューン・T・ハラウン一等陸士です」

「よろしくな」

そして、僕たちはヘリに乗り込んだ。

「この二人がはやてが見つけた子たちだね？」

「うん、二人ともなかなか伸びしろがある子や」

えつと、スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士か。

階級僕より下じゃないか。

年齢上なのに…。

僕が異常なのか？

「うん、異常や」

「八神二佐、勝手に人の心読まないでください」

「異常じゃないわけないやろ？ 陸士士官学校を5歳で入学。1年後には首席卒業。その後フェイトちゃんの切り札として活躍。わずか7歳にして一等陸士」

「うん、ジュンは異常だね」

「異常っすね」

母さんだけは信じていたのに、あっさり肯定された…。泣きたい……。

「あ」

「どうしたんですか？」

「どうもサーチャーに流れ弾が当たったみたいなんよ」

どうせ、どちらかが無茶した結果だろう。

「なのはに任せよ」

そやね、とはやてが言って3人が見守る中、ランスター二士が出てくる。

全員が無茶、無謀と考えているだろう。でも僕は違う。

この2人は才能に満ち溢れている。

だから僕はこの2人が絶対合格すると確信している。

「それでは、僕は仕事がありますので」

「あれ？　なんか仕事あつたっけ？」

母さんが疑問に思うが僕はゆっくりと首を横に振る。

「高町教導官が考えていることを先に用意するだけです」

「????」

おそらく高町教導官はこう考えるだろう。

『実力や魔力値はBランクを超えているけど、危険行為により減点。しかし、このまま陸戦Cランクでいるのは危ないので、本局の先輩からいろいろ学ぶための推薦状を用意した。』

3、4日後には再試験が受けれるように手配しよう
『とまあこんな感じだろう。』

地上本部の顔見知り結構多いので頼めばやってくれるでしょう。

「では、お先に失礼します」

「あ、うん。お疲れ様……」

さて、高町教導官と僕の信頼できる先輩は……。

「いるのかな……?」

そう呟いて、ジュンはヘリから飛び降りた。

「フェイトちゃん、ジュンくん大丈夫なん？」

「うん、大丈夫。一応飛べるから」

そういう意味やないんやけど、と思うはやてであった。

所変わってとある一室。

「部隊名は『時空管理局本局・遺失物管理部・機動六課』!!」

「登録は陸士部隊。FW陣は陸が主軸やな」

八神はやては自分が部隊長を務める部隊のあらましをスバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士に説明していた。

そして、その時ジュンかというと――

「高町教導官」

「ん？ あ、ジュンくん!! 久し振りー!!」

「はい、お久しぶりです高町教導官」

ジュンは軽く敬礼をする。

そんなジュンに苦笑するのは。

「どうしたの？ なんか用事？」

「はい、高町教導官にこれを」

ジューンはなのはに封筒と中に入れる書類を渡す。

「なにこれ？」

「本局の先輩たちによる講習。その承認の書類です。必要かと思いまして勝手に用意させてもらいました」

「いいよ、ありがとう。助かったよ」

「では」

S i d e なのは

「では」

そう言って引き返していく。
あれ？

「フエイトちゃんのところにはいかないの？」

「まだ仕事があるものですから」

ジューンくんはそのまま歩いて行った。
執務官補佐って忙しいのかな？

S i d e O u t

「ヤバいな、遅れてる」

あれから1週間の時間がたち、機動六課設立のあいさつの時間にジユンは六課隊舎内を走っている。

ジユンは昨日地上本部の会議のセッティングに思ったより時間がとられ、気がついたら朝日が昇っていた。

八神部隊長の挨拶まで多少時間があつたので仮眠をとっていたら……

「ごらんの有様さ……。ん？」

ジユンが隊舎を走っている途中、なのはが視界に入りなのはの方向に向きをかえ再び走る。

「高町教導官」

「あ、ジユンくん。遅刻だよ」

「申し訳ありません……」

ジユンはもう魔王モードにならないことを祈り、謝る。

「あとで、はやてちゃんに挨拶するんだよ？」

「はい……」

「じゃあ行こうか」

このとき、ジユンは疑問を抱いた。

この後のジユンの予定は、会議に出席し書類をまとめ、シャワーを

浴びて寝ることだった。

やっていることは少ないが実はこれはすごく大変で、会議に出席した時には一字一句間違ふことなくそれぞれ先方の言ったことなど記録しなければならぬ。

これはジユンが勝手にやっていることだが、ごく稀に会議で言っていた内容と違うといちやもんをつける輩がいるからだ。

これの対処に困っていた母さんに何かいいアイデアはないか、と聞かれてこれを始めた。

それでも、長くやっているといくとキーをたたくスピードは上がるがそればかりにかまけている暇は執務官補佐にはない。

時には執務官の意見の穴を突いた輩の穴を突き返したりとやることは山づみだ。

だから、母さんの補佐は結構気疲れするのだ。

しかもそれを母さんに気づかれないうちに振る舞わなければならない。

そんな仕事があるのに高町教導官は”じゃあ行こうか”といった。

4人のFWメンバーを後ろにひきつれて。

ここまでくればもう明らかだ。

ようは”訓練行こうよ”ということだろう。

しかも教導官は高町なのは。

これはもう必然的に『ジユンくんの実力が知りたいから模擬選やろうか?』という展開が目に見えている……。

「いや、でもフェイト執務官の許可が――」

取れてませんと続けようとしたが――

「フェイトちゃんの許可なら取ってるよ?」

ジユンの逃げ道は早々に崩れ落ちた。

「わかりました……」

しょうがないのでなのは後についていくジュン。
哀れジュン……。

訓練場につき、FWとの自己紹介が終わっていないので自己紹介をし
ろとの魔——もとい、高町教導官がおっしゃった。

「なんか魔王って聞こえた気が……」

「気のせいでしょう？」

「じゃあ、自己紹介しようか。スバルから」

「はい！！ スバル・ナカジマ二等陸士です！！」

「スバル、何階級下の子に敬語使ってるのよ。ティアナ・ランスタ
ー二等陸士よ。よろしくね」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。こっちはフリード」

「キュクル」

「エリオ・モンディアル三等陸士。よろしく」

じゃあ、次はジュンくんだね、と促させるまま順は自己紹介をした。

「えっと、ジュン・T・ハラウン執務官補佐です。階級は一等陸

士です」

最後によりしくお願いしますと付け加え、きれいな敬礼をする。

「「「ええゝ!!!」「」「」

「一等陸士って年齢は!？」

ティアナがすぐに質問する。

「7才ですね」

「テストロッサ・ハラウンっていうのは!？」

「フェイト・T・ハラウンは僕の母さんです」

「じゃあ、ジュン一等陸士がフェイトさんの切り札って言われている!？」

「世間一般ではそう言われてるそうですね」

みんなもう黙りこくる。

すると、ティアナがいち早く我に返り叫ぶ。

「失礼しました、ジュン一等陸士!！」

きれいな敬礼を見せる。

そのあとに続いてFW全員が失礼しました、と言って同じく敬礼をする。

ジュンはおろおろしてどうしようか迷っている様子。

それを見て、後ろで腹を抱えて笑うのは。

「いや、あのですね…僕のことは呼び捨てでいいですよ」

「はあ…しかし」

それでもティアナは下がらない。

「年下に敬語って嫌じゃないですか？」

「いえ、そんなことは…！」

ジューンはやれやれと言って言葉を紡ぐ。

「僕はさ、尊敬すべきは”階級”ではなく”年齢”だと思うんです」

「”年齢”ですか…？」

「うん。”階級”は各々（おのおの）が上げた戦績を示すけど、”年齢”は各々が歩んできた人生を示します。そして、さっき言ったのを詳しく言えば、尊敬すべきは”人生”であって”戦績”ではない。確かに軍人として何より大切なのは軍規と階級、そして命令です。だけど、人として大事なものは敬愛するということとは思いませんか？」

「は、はあ……」

「どんな人でもそれぞれに歩んできた人生があります。人によっては悲しい過去や苦しいことだってあったかもしれせん。でも、その人は今を生きているんです。自分よりはるか多い年月を」

F W陣はもちろん、さっきまで笑っていたのはさえもすっかり聞いている。

それほどにジュンの言葉は重く感じた。

この場の全員が思うことだろう。

彼に一体何があったのかと――

一体なぜ彼はここまで考えたのだろう――

彼はここまで追い込まれていた時期があったのだろうか――
たった7歳の彼に一体何が――と。

「しかし、その人の階級は三等陸士です。つらい過去を持ったにもかかわらず。そんな人を顎で使う人もいるかもしれない。ですが、僕はそんな人になりたくはない。そう思ったからこそ僕はこの持論を掲げているのです」

「ですので、僕のことはどうか”ジュン”と読んでください」

「……」

「ダメですか？」

「……」

ジュンは自分の思いをすべて話した。それでも呼んでくれないのかと思うと何のために話したのか分からなくなる。
しかし、ティアナたちF W陣はなにも返せない。

「……ダメならだめで結構ですよ？ 自分の持論を他人に押し付けることはしませんから」

ジュンは優しく言う。

別に彼女たちが悪いわけではない。
でも、自分が悪いわけでもない。

それでも、自分の考えが否定されたようで悔しくなる。

「高町教導官、訓練を始めましょう」

「あ、う——」

「ジュン——」

なのはの返事に割って入るような感じでスバルがジュンの名前をつぶやく。

その言葉にジュンは目を見開いた。

「ジュン——」

「ジュンさん——」

「ジュン」

スバルに続いてティアナ、キャロ、エリオの順でジュンの名前を呼んで行く。

そして、ジュンは——

「はいっ！——」

満面の笑みで返事をした。

それが機動六課での彼の始まり——

第1話 彼の始まり（後書き）

ということ、第1話 彼の始まり どうでしたか？

なんかグダグダなような、そうでないような…。

そんな感じが否めませんね。

それにしても、いやゝ主人公の身にいたい何があったんでしょ
うね？

おもにフェイトに出会う前。

作者のはずの私が一番気になっていると思うのですが……。
何と行き当たりばったりな小説！！

落ちが決まっていけないのに書くとは！！

愚かなり私！！

まあでもそんなものでしょ？

ああにしてもジュンくんの変わり具合が半端ない…。

もともとですね、ジュンくんは”仕事ができるが人見知り”なか
わいい男の”娘”にする予定だったんですよ！？

それなのに……それなのに！！

いつの間にか外見に見合わない精神年齢の少年に……！！

ああゝ本当のジュンくん帰ってきてゝ！！

まあそんなことはさておき、どうです、1話。

なかなかいで——きではないですね、ハイ。

楽しんでくれているなら幸いです、そうでない方は読むのをやめることをお勧めします。

もうしばらくはこんな感じで進むんで、見苦しいと思います。

それでもいいという方はぜひ見てあげてください。

これはもう趣味に近いので。

では今回はこの辺で。

次は2話ですね。

できるだけ早く仕上げるので遅くてものぞきに來てくれたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0250z/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS ~小さな少年の小さな勇気~

2011年12月2日21時45分発行